

人生・経営における「二つの理念」

株式会社山西 代表取締役社長 西垣 洋一

参考文献 “可能思考で生き抜け”

私は基本的な生き方、経営に対する考え方、あるいは人材育成の理念として三つのことを考えています。「大運は天なり」「大事を急げ」、「人生三觀」の三つです。

「大運は天なり」

「大運は天なり」とは、時代背景をしっかりと見極めて、自分自身の奢りを戒めよといふ意味なのです。人生に浮き沈みがあるように、企業にも時代の流れの中で栄枯盛衰があります。だから、経営者はいつも「時の利」というものを見極めて、なおかつ、一〇年後、二〇年の準備を絶えず怠ってはならない。これが私の「経営に対する考え方」の一つです。

逆に、時代をよく見極めれば、そこに新しいチャンスを見つけることもできます。

柳生家の家訓によれば、人間の能力に違いというものがあるなら、次の二つの違いだけだと言います。

一つは「小才は縁に気づかず」。時代が変わろうと、環境が変わろうと、こうにその変化に気づかない人、それを才能の少ない人というわけです。「自分の店は場所が悪い」とながら年中、不平不満ばかり言っているだけで、「今のこの店をどうしたら売上げを伸ばすことができるか」という視点がない。時代や環境を見極めれば、チャンスがあるというのに、それに気づかないのです。

二つ目は「中才は縁を活かさず」です。孔子の言葉にも「知りて行わざるは知らざるに等し」とありますが、才能が中くらいの人は、時代の変化とか環境の変化に気づきはするのですが、しかし、それを活かさない。「こうすればうまくいく」ということをわかっているのに何もしない。当たり前のことをしないのです。それを中才の人と云うのです。

そして、三つ目が「大才は袖すりあう縁まで活かす」ということです。おわかりいかと思いますが、大きな才能のある人は、機敏に考え、そして行動するということです。こういふ人はまた逆境に落ちてもビクともしない。マイナス要因をプラスに持つていき、そして、チャンスを活かすわけです。

この家訓に照らし合わせたとき、自分の生き方がどこに当てはまるか、考えてみると私は自分を戒めています。ともかく、私の経営に対する考え方の第一は、この「大運は天なり」ということです。そして、この言葉の中には、奢りと高ぶりへの反省と、チャンスをいかに活かすか、どう二つの意味が込められているのです。

「大事を急げ」が示唆する使命感と喜び

「…されば一生のうち、むねとあらまほしからむ事の中に、いづれかまちうとよく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひすてて、一事をほげむべし。一日の中にも、あまたのことのきたむらむ中に、少しも益のまさらむ事をいとなみて、その外をばうちすて、大事を急ぐべきなり。何方をも捨てじと心にとり持ちては、一事も成るべからず…。」

これは『徒然草』の節です。

「されば一生のうち…」とは、私たちの一生なんか、過ぎ去つてしまつたら「アツ」という間ですよ、という意味です。そしてそういう人生なのだから、「あれがいいのか」「これがいいのか」と迷わず、自分の人生にとって何が一番価値のあるものなのかを、いち早くしっかりと見極めなさい、と言つてゐるのです。「あれも欲し」「これも…」といつまでも思つていては何事も成就せず、それだけで人生は中途半端に終わつてしまつます。と説いているのです。

またたくその通りです。この「大事を急げ」という言葉こそ、人間の生命というか、私たちに与えられた人生に対する問いかけなのです。例えば、私たちは必ず何年後かには死んでいきます。生は永遠にはありません。だから、私たち自身に今与えられている生命的の尊さに気づき、「なぜ今生きているのか」ということの答えを見つけ得なかつたとしたら、私たちの人生は空虚なものに終わつてしまふでしょう。

私の哲学の師で哲学者の芳村思風先生は非常にいい文章で、こう書いておられます。

「人間において生きるとは、ただ単に生きながらえることではない。人間にとうて生きるとは、何のためにこの命を使うか、この命をどう活かすのか、といふことである。命を活かすとは、何かに命を賭けるということである。だから、生きるとは命を賭けることだ。命の最高の喜びは命を賭けても惜しくないほどの対象と出会うことにある。その時こそ、命は最も充実した生の喜びを味わい、激しくも美しく燃え上がるのである。君は何に命を賭けるのか。君は何のためなら死ぬことができるのか。この問いに答えることが『生きる』ことだであり、この問いに答えることが人生である」

人はそれぞれ「死生観」というものを持つべきだと思います。そこから真のパワーといふものは天なり」ということです。そして、この言葉の中には、奢りと高ぶりへの反省と、チャンスをいかに活かすか、どう二つの意味が込められているのです。

「大事を急げ」とは、そう、うことなのです。自分が命を賭けても、ような、そういう対象のが生まれてくると思うのです。

と出会うということ。私にとっては、とりもなおさず「経営」であり、「人を育てる」ということでもあります。しかも、その賭ける対象に出会うのは、少しでも若いほうがいいと私は思うのです。そのほうが残りの人生をより充実したものにできるからです。本当に自分の賭けるものを自分の手でつかまえた人、すなわちこの「大事」というものを知つた人の人生こそが真に幸福な人生であると言えます。

しかし、世の中には、自分自身の人生がどれほど大事か、その認識を持つてない人がたくさんいます。そして、彼らは自分の考え方方に問題があるにもかかわらず、いつでも「誰かが悪い」と他人ばかりを責めています。成長できない要因があるとすれば、そこに問題があるわけです。

「徒然草」はまた、こうも言っています。

「世間の人なべて、このことあり。若きほどは諸事につけて、身を立て、大きな道をも成じ、能をもつき、学問をもせんと、行末久しくあらますことども、心にはかけながら、世をのどかに思ひて、うち急りつつ、まずさしあたりたる目の前の前にのみまぎれて月日を送れば、ことごとなすことなくして身は老いぬ。ついにもの上手にもならず、思いし様に身を持たず、悔ゆれどもとりかえざる齢ならねば、走りて坂を下る輪の、どくに衰えゆく」

「人生三觀」の「觀」とは何か

三つ目の理念は「人生三觀」です。これはむしろ「人材育成理念」といつたほうがいいかも知れません。田辺経営主宰者の田辺昇一さんの書かれた本のタイトルに「強小は弱大に勝る」というのがあります。小さくても強い企業は、大きくて弱い企業に必ず勝つという意味ですが、実は私たちのポリシーもまたこの言葉どおりなのです。

追求するのは売上げだけではない、キチンとした成果を上げなければ駄目だ、中身のある経営こそが肝心であるということです。経営基盤は小さくともいい。教育理念として「人生三觀」という言葉を揚げたのです。三觀とは人生の中の見えない三つのもの、つまり、職業、人生、人間を観ると、う意味を持つて、います。

「人生三觀」の「觀」という字は、非常に意味のある言葉です。「見えないものを見る」と、うときに使われます。例えば、「どうも最近は売上げが上がっていないな」というとき、人々はその上がっていない現象面ばかりを見てしまいます。「なぜ、上がっていないのだろう」という、そういう「なぜ」という見えないものを見るのがこの「觀」という字なのです。しかも経営者にとって、この見えないものを見るという力こそもっとも要求されるところなのです。ところが、私たちは現象面ばかり見て、いる。「うまくかない、うまくいかない」と、うまくいかない

ことばかり見ているわけです。「なぜ、うまくいかないのか」という見えないものが見えてこない。しかし、人生も経営も、この見えないものを見るようにしていると、成長なんかわめて簡単なのです。ここが見えたたら問題解決など九割がた終わつたようなものです。ところが、人間というのは、この見えないものを見たがらない、だから問題が解決されないのです。

「觀」という字について、もう少し私見を述べてみます。

「般若心経」を私なりに解釈しているのですが、この「觀」という字はその最初に出てくる文字です。

「觀自在菩薩 行深般若波羅蜜多時…」

この「觀自」の意味は「自分の中の見えないものを徹底して見なさいよ」ということです。自分自身の中を徹底して見ていくと、自分の中に菩薩が存在するというように解釈できるのです。つまり、自分自身の中にすごい潜在能力、パワーといつものがあるという意味なのです。だから人生でも経営でも「自分にはもつとすごい力がある」「自分の会社には、成長するチャンスがたくさんあるんだ」と、そういう観点で日常の仕事をしたり、人間関係をつくったり、行動を起こして、もつともつと自らを深く追求していけば、完成された人生になる、と私は思つて、いるのです。「行深」とは行いを深くするという意味であり「波羅密多」とは完成するという意味にもとれるのです。

さらに、換言すればこう、いうことでしょう。人間は誰しも人としての優しさ、勇気、叡智など多様の力を持つて、いる。ところが、自分自身を深く見ず、自信もないのに虚勢を張つたり、うなだれて人生を送つてしまいがちです。人間の本性の探求とは、自分の中に菩薩の存在を見つけ、日常を通して深めていくことです。そうしてこそありのままの自分の能力が發揮できるものと思うのです。経営の中にも見えないものがたくさんあります。社員が何で苦しんでいるのか、何に喜んでいるのか、それが見える人こそ優秀なリーダーであり、経営者です。自分の能力、態度、言葉、感情、行動に気づくこと、それがすべてに対する人生、経営の基盤であるということなのです。

すべてのチャンスは私たち一人ひとりの中にあり、経営にしても、店を成長させるのも、他人やまわりにあるのではなく、みな自分自身の中にあるのです。「売上げが上がらない」「人間関係がうまくいかない」というのは、そうした「觀」を發揮しようとしないからです。私はこの教育理念を考え出すのに相当な時間がかかりました。自分の精一杯の知恵を組み立て、いた時、フツと思い出したのが、この『般若心経』。そこに結びつけて、「人生三觀」が生まれたのです。

「人生の中で見えないものの三つを、基本的に見えるような人材の育成をして、こう